である。私たちの大学の医学部教授だったG博士はオペラのレコードばかり集め十数個のスピーカーでオペラの臨場感を楽しんでいた。またB博士はモーツァルトのピアノ協奏曲ばかり、手に入れらるものはすべて買っているし、理学部のS教授はカザルスのチェロ曲ばかりねらって買い求めている。また、さきごろサロンコンサートを開いた若い半職業的ピアニストのOさんも科学者で、やはり自然科学者らしい共通した“くせ”を持っている。すなわち、彼はシュトラウスの曲以外は絶対に弾かない。

私自身も自然科学者として、どうやらこの“くせ”を持っており、シュトラウスのレコードは大抵持っている。特にオペレッタ“こうもり”全曲を7種揃えていることをささやかな自慢にしている。それはともかくとし、新年のすがすがしい朝、くつろぎながら聴く“新年演奏会”のワルツやポルカの美しさはまた格別である。(「理数」啓林館、No.122、2－3頁、1977)

「音楽と人々とドナウ」

“ヨーロッパに旅行したいのですが、どこを訪ねたらいいでしょうか。”私はこう答える。“音楽がお好きですか？それならウィーンを訪れたらいいと思います”、“博物館？それならウィーンがいいでしょう”、“御馳走？それならウィーンです”、“お菓子？それならウィーン”等々、要するに私は誰にでもウィーンを訪ねることをすすめるわけである。なぜなら、私はウィーンが好きでたまらなく、自分が行けないときでも知人に訪ねてもらい、ウィーン好きの仲間をふやしたいからである。

ウィーンを、チーシンスキー作曲のウィーナーリートは次のように唄う：

ウィーンよウィーンよ、
お前だけはいつまでも私の夢の都でいてほしい。
ウィーンでは古い家が並び可愛い娘たちが散歩する。
ウィーンよウィーンよ、
お前だけはいつまでも私の夢の都でいてほしい。
ウィーンでは私は幸せでいい気分だ。
それがウィーン、私のウィーンだ。

Wien,Wien, nur du allein
sollst stets die Stadt meiner Träume sein,
dort wo die lieblichen Mädchen gehen.
Wien,Wien, nur du allein
sollst stets die Stadt meiner Träume sein,
dort wo ich glücklich und selig bin,
ist Wien, ist Wien, mein Wien.

私の好きな“夢の都ウィーン”だが、もう少し正確にいうと、私の好きなのはウィーン音楽である。リンクの中央にそびえる聖シュテファン寺院の塔、街の北を流れる碧きドナウとその近くのプラーター公園、西郊外のウィーンの森など、この街のたたずまい、郊外の自然と融け合ったウィーナーリートやシュトラウスの音楽ほど私の好きなものはない。

『シュトラウス像』

ナポレオンがエルバ島に流された後のウィーン会議の頃、すなわち19世紀はじめ、ウィーンはメッテルニッヒの支配するヨーロッパ政治の中心だった。この頃のウィーンの雰囲気は有名な映画“会議は踊る”でしのぶことができる。この映画の中で歌われる主題歌“ただ一度の贈物”や“ウィーンとワイン”はウィーンに対する私たちのあこがれをかきたてる。

ウィーンといえばワルツ、ワルツといえばワルツ王ヨハン、シュトラウス2世である。シュトラウス2世については多く書かれており、私がここで改めてくわしくのべるまでもない。第二次大戦中、オーストリアがドイツに併合されたとき、ウィーンのシュトラウス協会は、シュトラウスの先祖にユダヤ人の血があることをひたかくしにかくし、シュトラウスの曲の演奏をナチスが妨害しないように努めたという。シュトラウス2世は1825年に生まれ、1899年に亡くなった。科学が飛躍的に発展する一方、戦争と革命に明けくれたなかでみごとに開花したウインナワルツの時代、つまり19世紀のちょうど4分の3をシュトラウス2世は生きたわけで、4分の3拍子のワルツの王者らしい符合である。

ウィーン市の東南、リンクの外側にある市立公園にはシュトラウス像がある。今にもスタカートの響がほとばしり出そうな、バイオリンを弾くシュトラウス像は、いつ見ても、どんなに長い間見ても立ち去りがたい。私はこの像の前のベンチに腰を下ろし、暫くシュトラウス2世のバイオリンを聴かないと（聴いたつもりにならないと—それはボスコフスキーのバイオリンの音色なのだが)、ウィーンを訪ねた気がしない。この像の除幕のとき、1921年、アルトウール・ニキシュの指揮するウィーンフィルハーモニーが“美しく碧きドナウ”を像の前で演奏したという。

公園の南の外れにはクーアザロンがある。夏の夕べ、ここに人々は集まってワインやコーヒーを飲み、野外音楽堂で演奏されるシュトラウスの曲にあわせてワルツを踊る。老いも若きも、そしてウィーンっ子も我々日本人も。

『ウィーンフィルと新年演奏会』

1839年に創設されたウィーンフィルハーモニーは私たちにもおなじみである。第二次大戦さ中の1941年、戦争で暗い気持ちのウィーンっ子たちのために、時の指揮者クレメンス・クラウスは元日の朝ワルツ、ポルカを演奏する<新年演奏会>をはじめて開催した。宰相メッテルニヒの秘書だった祖父、国立劇場のダンサー、歌手だった母をもった（父については両説あって、ウィーンの貴族だったとも、イタリア人だったともいう）クラウスは、ウィーン少年合唱団員として少年時代を送り、のちにウィーンフィルハーモニーの常任指揮者となった。クラウスはシュトラウスのワルツ、ポルカをはじめて本格的にこのオーケストラに演奏させた指揮者といってよいであろう。新年演奏会は（一般に大みそかの夜と新年の朝の2回演奏される）戦後も休みなく続けられたが、1954年クラウスがメキシコで客死したあと、当時コンサートマスターだったウィリー・ボスコフスキーが新年演奏会指揮者の地位を継いだ。シュトラウスばりにバイオリンを弾きながら指揮するボスコフスキーの演奏は、ウィーンフィルのアンサンブルの美しい独特の音色を十二分にひき出し、たとえようもないみごとさである。

数年前の1972年元旦、ボスコフスキー氏の好意で楽友会協会（市立公園のすぐ南）大ホールに招かれ、新年演奏会をきいた感激を私は今でも忘れることができない。ワルツ“春の声”の

第1音が響いた瞬間、私は“これがウィーンフィルだ”と体でわかったような気がした。最近では新年演奏会の模様が日本でもテレビで放送されるので、読者の多くもご存じと思う。新年演奏会の最後はシュトラウス1世の“ラデッキー行進曲”でしめくくる伝統ができているが、最近シュトラウスの曲の演奏会は、ほとんどすべてこの伝統を採用しているように見受ける。

『ウィーンのオペレッタ』

シュトラウス2世の死後に出版されたオペレッタ“ウィーン気質”には彼の有名なワルツやポルカがふんだんにとりこまれている。第3幕のヒーツィングのカジノの場面に次のような、ウィーン情緒の豊かな洗濯女の唄がある：

行って私の着物を売っておしまい、
バイオリンがウィーンの唄をやさしく
やさしく奏でるとき！
わたしは天国にいる。
わたしの着物を売っておしまう、
天国に行って。
ウィーンで踊ればこの世はすてき。
（保柳健、大町陽一郎訳）

Geht's und verkauft's mei' G'wand -I' fahr in'n Himmel,
Wann d' Geigen fiedeln.
Geht's und verkauft's mei' G'wand -
I' fahrt in'n Himmel,
Beim Wiener Tanz
Vergisst man d' Sorg ganz!

シュトラウス2世はこのほか“ベニスの一夜”“女王のハンカチーフ”“ウィーンのカリオストロ”などの多くのオペレッタを作曲しているが、代表作はやはり何といっても“こうもり”と“ジプシー男爵”であろう。リンク、ケルントナー通り角の国立劇場や西駅近くの国民劇場あるいはライムント劇場などではしょっ中オペレッタを上演しており、レハール、ミレカー、ツェラーなどの作品とともに、この2つのシュトラウス2世のオペレッタが上演されることも多く、私も随分楽しんだ。“こうもり”の場面はウィーンでなくバトイシュルだし、“ジョプシー男爵”も第3幕にウィーンが出る程度で、舞台はハンガリーのジプシー村なのに、これらのオペレッタがいかにもウィーン情緒に充ちているのも面白い。

周知のように、ウィーンっ子の話すドイツ語は特有のウィーン弁で（前掲の歌詞を参照）、外国人にはおそろしくわかりにくい。それなのに、ウィーン弁はとてもウィーン的でわからなくても聴いていて楽しい。“こうもり”はフロシュ、“ジプシー男爵”のツーパン、あるいは“ウィーン気質”のカグラーらのドイツ語はいかにもウィーンオペレッタ風である。ことに“こうもり”第3幕の牢獄の場で酔っぱらって喋るフロシュのせりふは、上演ごとにギャグが入り、われわれ日本人にはとても理解できない。彼のせりふについて行けないのはいかにも残念だが、それでも楽しいのがウィーンオペレッタである。わが家でオペレッタのレコードを聴きながら、

ウィーンの舞台を思いおこすのが私の楽しみのひとつである。

『ツィターとドブリンガー』“会議は踊る”の背景がウィーン会議の1814－15年なら、“第三の男”は1945－46年頃の戦後の荒廃したウィーンを描いている。この映画でツィターという楽器と、その美しい音色を知った方も多いであろう。ツィターは大変古い楽器で、ウィーンに限らず、オーストリアのチロル地方や南ドイツでも古くから演奏されている。“第三の男”の演奏で有名になったアントン・カラスはもう年老いてろくに演奏もできなくなったときく。今はこの古い楽器を演奏できる人が減ってしまい、淋しい限りである（日本には世界屈指の奏者、河野保人がいる）。

シュトラウス2世の“ウィーンの森の物語”のはじめと終りの2か所でツィターの嫋嫋たる演奏が入るのをご存じの方も多いだろう。私は少年のころから、この音色をレコードで聴くたびにツィターの生演奏をききたい、自分で弾いてみたいと願っていた。

ウィーン郊外、いわゆるウィーンの森の北方（市の西北）のグリンツィング村にある新酒の酒屋ホイリゲ、そしてもちろん市内の酒屋などでは小編成の楽隊（19世紀のシュランメルのような）がウィーナーリートやワルツ、ポルカを演奏している。かっては、そういう酒場でツィターの演奏がきけたものであるが、最近ではなかなか機会に恵まれなくなった。

数年前、私はリンクの中、ドロテア通りの店ドブリンガーを訪れ、ついにツィターを買った。それ以来、暇をみてはツィター演奏の練習に指先を痛めながら、そして大変楽しみながら悪戦苦闘しているが、“ウィーンの森の物語”のテーマを弾けるようになるのはいつのことかと心許ない限りである。

ドブリンガーは楽器、楽譜、レコードの部などに分かれており、こと音楽に関する限り大抵のことは用が足せる。音楽好きの方は、ウィーンに行ったときにはこの店を訪ねることをすすめる。何時間も退屈しないくらい音楽に関するあらゆるものが豊富に揃っている。中年の親切な婦人が何人かいて、いろいろ注文に応じてくれる。

「ウィーンと“美しく碧きドナウ”」

私はモーツァルトもシューベルトも、そしてベートーベンも皆無視してしまった。音楽の都ウィーンというとこれら楽聖の名をあげるのがふつうであろう。ウィーン市内にはこれら楽聖の像やゆかりの家が方々に建っているし、郊外（市の東南）の中央墓地には楽聖たちの墓がずらりと並んでいる。しかし、私にとってウィーンともっとも密接に結びつく作曲家たちはシュトラウス1世、2世、2世の弟たち、レハール、ミレカー、ツェラー、シュトルツなどである。

ウィーンの森とともにウィーンの町と切っても切れないのはドナウ川である。シュトラウス2世の“美しく碧きドナウ”は近ごろblau（青）でなくbraun（茶）なのは残念だが、それでもなお美しく、そして碧いのはウィーンのドナウ川である。オーストリアの第2の国歌といわれるこの曲なしにはシュトラウスも、そしてウィーンも考えられない。私の思い出の新年演奏会でも、いくつかのアンコールのあと、ボスコフスキーがバイオリンを片手に“わかっている、わかっている”といわんばかりに、拍手する聴衆を制し、そしてあのさざ波のような“美しく碧きドナウ”の導入部の演奏に入った。聴衆は喜んで足を踏み鳴らし拍手かっさい。ボスコフスキーはそこで演奏を一旦やめ、再びこの曲を最初から演奏しはじめた。

演奏会の終ったあと、昼すぎのウィーンの町をリンクにそって歩く私の耳にはいつまでもあの美しいワルツの旋律と、ウィーンフィルハーモニーの何とも表現しがたい妙なる音色が響いていた。(「パスポート」日本交通公社、5月号、ウィーン特集、1980。一部「千里楽だより」No.1, 1981に転用)

「日本経済新聞“ライフワーク”」(記事)

—アントン・カラスの演奏で、名画「第三の男」をいっそう忘れ難いものにしたツィターの調べ。ドイツ、オーストリアに根を張るこの民族楽器も、奏法の難しさ、音量の乏しさなどからしだいに世に取り残され、今は自在に操れるプロ演奏家もわずかという。ウィーンの音楽にほれこみ、ヨハン、シュトラウスの水先案内でツィターを手がける大阪市立大学教授増田芳雄さんにツィター賛歌を奏でてもらおう。

「少年の日、心に誓う」

今から四十数年前、当時小学生だった増田少年は、SPレコードによるワルツ『ウィーンの森の物語」を、胸を熱くしながら聴き入っていた。初めと終りの部分で奏でられる、うっとりするような弦楽器のソロがツィターであるとは、まだ知らずに。しかしひときわロマンティックで陰影細やかな音色のとりことなった少年は、ひそかに心に誓った。「いつかこの曲を自分で弾いてみたい」。

昭和51年。ヨハン、シュトラウスに憑かれてウィーンもうでもすでに5、6回を数えていた増田さんは、このあこがれの都で、珍しく楽器店のケースに鎮座していたコンサート用ツィターを見かける。少年時代から思いを募らせて来た“恋人”とのめぐりあいに小躍りし、一も二もなく日本へ連れ帰った。楽譜もなければ、奏法も不明のままに。

旋律弦が五本、伴奏弦が二十七本という不可思議な楽器である。フレットを押さえると左手指が裂けそうなほど痛み、二年間はどうあがいても鳴らず響かず。その後、プロ演奏家の河野保人氏を知り、「日本ツィター愛好会」の仲間数人と時折その手ほどきを受けて、今では、かたくなな“恋人”の心も少しずつほぐれてきた。

ツィター奏者、河野保人氏の話「楽器というのは弾き手の性格がもろにでるものだが、増田さんの演奏は確実できちょうめんな人柄が現われている。若い人は小器用に要領よく弾くけれど、結局長続きしない。音楽の方で逃げてしまうのです。その点、彼は誠実で、生徒としても期待できる」。

「大衆の生活に密着」

ウィーンの森にはホイリゲと呼ぶ居酒屋があちこちにあり、ツィターの響きが歩き疲れた人々の心をいやすとか。「ワインを飲み、おしゃべりに興じながら、のどかなツィターの調べに身をゆだねる気分は、まさしくドイツ語で言うゲミュートリッヒカイトの世界」と増田さん。この言葉、日本語には翻訳不可能とされるが、あえていうなら、繊細で明るくて、気楽ないい気分といったところ。

それはまた古来、異民族が出会い、溶け合うるつぼであったウィーンの人々の多分に享楽的な気質にも通じるものである。音楽のない生活がウィーンっ子にとって考えられないように、